

「光明寺団地」及び「南ヶ丘」に至る、
「取付道路の整備」に関する要望書の提出について

「光明寺団地」及び「南ヶ丘」における防災上の問題点は、団地に至る「取付道路」が二つしかないことです。一つはガケ崩れの恐れのある鎌倉市立第一中学校からの道と、「南ヶ丘」を経てセブンイレブンに至る、見通しの悪い急カーブ・急勾配の道路で、いずれも通学路となっているものの、歩道もなく安心して通れる道ではない。ひとたび「関東大震災」級の地震が起きれば、ライフラインは寸断、ガケ崩れ等により緊急車両も通行不能となり、住民が孤立状態になる可能性は高い。

現に、鎌倉側の「小坪海岸トンネル」では、秋の長雨により9月25日にガケ崩れが発生し、現在でも通行止めとなっているため、不自由な状況が続いている。

5年前の「東日本大震災」から日本全体が地震活動期に入ったと言われているが、今年4月に震度7の「熊本地震」が、10月9日に「阿蘇山噴火」、10月21日には鳥取では震度6弱の地震等が発生し、関東地方でも大震災の可能性が高まっている。「光明寺団地」及び「南ヶ丘」の団地が、大震災等で孤立しないためには、新規に道路を造ればよいのだが、用地費や工事費用等も莫大となり、実現するのは難しい。

しかし、幸いにも「南ヶ丘」の団地には、近道として利用されている旧市営住宅内を通る狭隘な道路があり、これを改良する方法が最適であると考えられる。

以前は、この道路の両脇に市営住宅が建ち並んでいたが、今は解体され広大な空地が生まれたが、道路と住宅用地とは杭で区画され、有効利用はされていない。

これだけの面積があるのだから、今の道路形状にはこだわらず、道路線形を変えれば、なだらかで歩道付きの広い道路とすることは十分可能である。しかも、道路は市有地であるため購入費が不要で、比較的安価に整備することが可能だ。

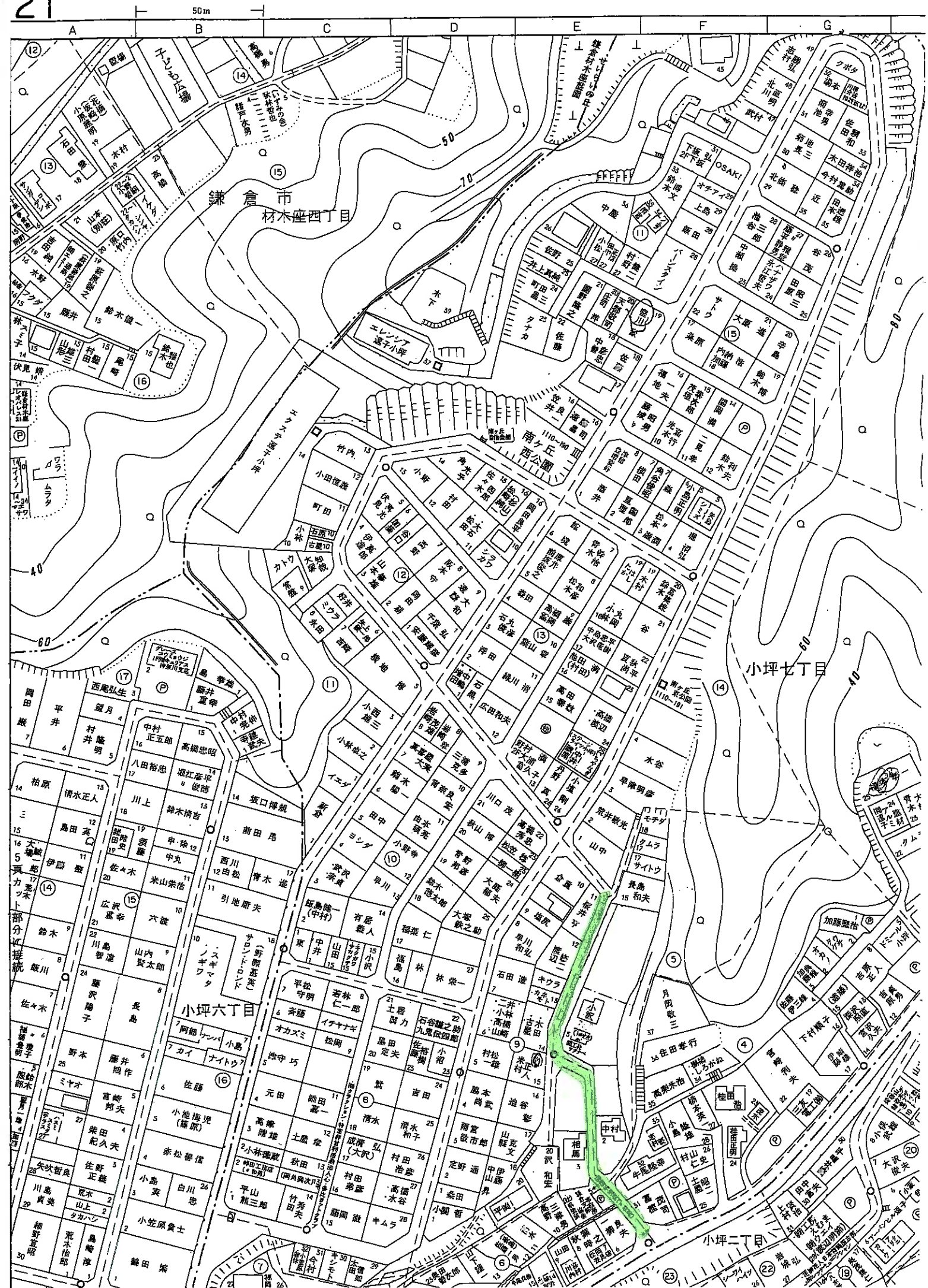
残地は、防災倉庫が置いてあることで、震災時の津波や崖崩れ等の被災者の仮設住宅用地とした「防災公園」として残す方法もある。防災施設の整備については、国庫補助もあるため、それが使えれば整備費用も、大幅に削減できると思われる。

逗子市が有効な土地利用を考えず、安易に敷地だけを売却した場合は、曲がりくねった狭く危険な道路が残されるだけで、住民は何の恩恵を受けることはないが、「南ヶ丘」への取付道路が改良されるなら、防災上「安心・安全な町づくり」、高齢者が望む「ミニバスの運行」、「歩行者の安全性の確保」も可能となり、これにより、私たち住民の生活環境は、格段に向上するようになると思われます。

以上の理由で、「光明寺団地」及び「南ヶ丘」では、逗子市に対し防災上の観点から「取付道路の整備」についての「要望書」の提出を考えています。

2016年10月29日

光明寺団地自治会防災部 鈴木伸治



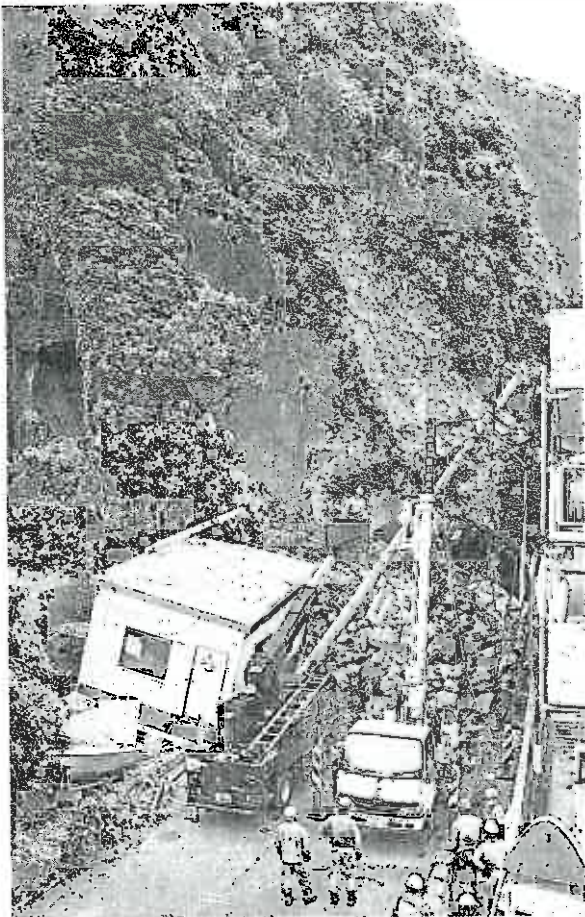
逗子市によると、23日夕方から夜にかけて、同市小坪5丁目の小坪海岸トンネル付近の崖が二度にわたって崩れた。大量の土砂が道をふさいでおり、市が復旧作業を急いでいる。

逗子で崖崩れ トンネル塞ぐ 国道134号も半日通行止め

崩落場所は国道134号にも近く、国道も約12時間にわたり通行止めになった。

現場はトンネルの鎌倉側出口付近で、23日午後5時半ごろに小規模な崩落が発生。午後11時45分ごろには高さ30メートル、幅10メートルにわたって土砂が崩落した。倉庫とみられる建物1棟が全壊し、マンション1棟と住宅1棟も一部壊れたという。けが人はなかった。

市は、長雨が影響した可能性があるとみている。小坪海岸トンネルは通行止めになっており、復旧の見通しは立っていない。



土砂が崩れて市道をふさぎ、近くの国道も一時通行止めになった。逗子市小坪5丁目、菅尾保撮影



小坪海岸トンネル土砂崩れまた発生
ヨットハウス全壊
23日午後11時45分ごろ

逗子市小坪5丁目の小坪海岸トンネル近くの斜面で土砂崩れが発生、斜面下のヨットハウス(2階建て)が全壊し、近くの電信柱も傾いた。約6時間前に続く2度目の崩落で、市都市整備課などが原因を調べている。けが人はなかった。

同課によると、2度目の崩落規模は高さ約30メートル、幅約10メートル。1度目と同じ斜面から崩れた。同トンネルは通行止めが続く、近くを走る国道134号も一時通行止めになった。逗子市内は20日から大雨警報が断続的に発令されていた。

(横須賀支社)

鎌倉 初の防災公園整備へ 3日間 2000人が避難生活可能

「マンモス広場」として親しまれる鎌倉市岩瀬の青少年広場(約9200平方メートル)が、防災公園に整備される。約2千人を収容でき、3日間程度の避難生活に対応できる。2015年春の完成を目指す。(川島 秀宣)

多目的広場(約4300平方メートル)をダスト舗装し、周囲に防火樹林帯を整備。ソーラー照明5機、かまどベンチ4基、防災バーベキュー1基、災害用トイレ23基、くみ取り式トイレ1基を配置する。



市民が掘削「憩いの泉」

災害時 水源に期待

UR都市機構が用地費約15億円を立て替え、個人所

URは完工後に市に引き渡す。有者から10年に取得した。本格的な避難拠点に生まれ変わるマンモス広場の片隅に、市民が人力で掘り当てた自噴井戸がある。市井に訪れた親子の完成の記念写真に納まる鎌倉市民同窓会メンバーら(2001年12月)

II 青少年広場



し、市は15～29年度にかけて返済する。総事業費約21億円のうち、約5億円を国の補助で賄う。

防災公園は高い防災機能を備えた都市公園で、市内初。市は1976年から所有者と賃貸契約を結び、広場を開放していた。

約4分の1の回し車の中に人が入って歩き、ひこを巻き取る仕組み。井戸工場で修繕した大船の農家・若林傳吉さん(77)が主導した。固い岩盤に当たって刃を落したり、竹ひこが折れたりとも難航したが、8カ月かけて帯水層に到達した。

深さは17.2メートル。この水脈を育む六国見山の標高(147.7メートル)以上を穿ったことになる。若林さんは「まさか山を越えるとは。われながらよくやった」。湧水量は毎分6リットル、水温は16度。飲用水としての水質基準も満たしている。

この湧水で炊飯する近くに住む平野真樹さん(40)は「子どもの食の進みが違う」。同市玉縄の吉田益啓さん(72)も「元氣のもと」と毎週20リットルに訪れる。

井戸掘りの刃や鉄管を提供した同市山ノ内の鍛冶職人・飯田秀男さん(83)は「大震災で水のありがたさを知った。災害時の水源として新しい役目が加わり、苦労したかいがある」と話した。

この湧水を活用して市民が造ったヒョウタン形のピオトープは防災公園の整備でなくなるが、市は規模を縮小して同形の湿地を整備するつもりだ。

(川島 秀宣)